

原始社会史の段階区分と前国家段階

徳本, 正彦
九州大学教養部教授

<https://doi.org/10.15017/1697>

出版情報 : 法政研究. 42 (2/3), pp.53-77, 1975-12-25. 九州大学法政学会
バージョン :
権利関係 :

原始社会史の段階区分と前国家段階

徳本正彦

はじめに

さきに筆者は、政治学の立場から、政治と国家の成立に関して、L・H・モーガン、F・エンゲルスの学説は、全面的に再検討され、かつ批判的に継承されなければならないと主張した。⁽¹⁾ たしかにモーガンは、「専門の知識をもつて人類の先史に一定の秩序をあたえようと試みた最初の人である」⁽²⁾ かれは、人類の歴史は根源において一であると考え、人類は野蛮 (Savagery)、未開 (Barbarism) の段階を経て文明 (Civilization) に達したとし、さらに、野蛮と未開の段階は、生活資料の生産の発展に応じて、それぞれ、低段階、中段階、高段階にわかたれるとした。このばあい、モーガンの認識の基礎にあったのは、人類は食糧の生産にたいする支配を獲得することをおして発展してきたのであり、したがって、人類進歩の時期は、多少の差はあっても、直接この生活資源の拡大と一致していたとみなければならないということであつて、それは長い期間をへだててあらわれた多くの技術によって創りだされたのだということであつた。⁽³⁾ E・チェレーも指摘するように、モーガンの社会発展論は、ダーウィンの進化論の影響を受けつつも、さらにそこから一步すすんで、歴史の唯物論的認識に到達したことが注意されなくてはならないし、⁽⁴⁾ その意味において、「エンゲルスがモーガンを歴史科学の創設者のなかに位置づけたのは間違いではなかつた」⁽⁵⁾ ということはで

きる。だがそれは、エンゲルス自身が注意深く留保をつけておいたように、「今後材料がいちじるしく拡大されたため、それを変更する必要がある、彼のおこなつた時期区分は、おそらくひきつづいて有効性をたもつてである」(6) (傍点筆者) というかぎりのものであった。そしてこの一世紀における、考古学や人類学をはじめとする原始社会史の研究は、材料をいちじるしく拡大し、「それを変更する必要」を生ぜしめているのである。

しかしながら、問題は、新しい材料による、個々の事実認識の修正や精密化にとどまるのであろうか。筆者は、もとより、歴史の一元的解釈や社会発展の唯物論的認識は、先見的な哲学や信条のたぐいであつて科学とは無縁のものであるとする、経験諸科学の立場をとるものではないが、歴史法則をとらえる方法のうえに立ちつつも、モーガンの段階区分やそれを受けたエンゲルスの理論的視座そのものを再検討する必要があると考える。このばあい、政治学徒としての筆者の基本的視点は、公権力の成立と国家の成立との発展段階の相違に注意しつつ、政治概念と国家概念とを区別するなかで、国家成立の歴史的構造をとらえかえさなければならぬということにある。本稿は、こうした観点から、モーガンの時期区分にかわる原始社会の発展段階論を模索しつつ、公権力の成立から国家の成立にいたる段階を前国家段階として把握し、その社会発展史上における位置づけを試みようとするものである。したがって、本稿の目的は、個々の問題を論ずることではなく、政治学の立場からする、原始社会史把握のための理論的枠組を設定することにあり、おことわりしておかねばならない。

一

モーガンが、原始社会の発展段階を画した際に基準としたものは、生活資源獲得の発展段階をしめす技術の進歩であつた。モーガン自身の表現をもつてしめせば、つぎのとおりである。

- | | | |
|-----|--------|--|
| I | 野蛮下層状態 | 人類種族の揺籃期から次期の開始まで |
| II | 野蛮中層状態 | 魚類を食糧とし火の使用知識を獲得してから次期の開始まで |
| III | 野蛮上層状態 | 弓矢の発明から次期の開始まで |
| IV | 未開下層状態 | 製陶技術の発明から次期の開始まで |
| V | 未開中層状態 | 東半球においては動物の飼育、西半球においては灌漑によるトウモロコシおよび植物の栽培ならびに日乾煉瓦および石材の使用から次期の開始まで |
| VI | 未開上層状態 | 鉄鉍熔解方法の発明ならびに鉄器の使用から次期の開始まで |
| VII | 文明状態 | 音標文字の発明ならびに書字の使用から現在にいたるまで ⁽⁷⁾ |

この区分は、当時、主として考古学者たちによってひろめられていた、石器時代、青銅器時代、鉄器時代の段階区分にくらべれば、あきらかにより総合的であり、より精密であった。とくにそれが、人類の生活史の発展段階をとらえている点は、今日においてもなお一定の有効性をもっているといつていい。モーガンはまた、このような認識だけでなく、他方では社会の発展段階を社会の統治形態の二つの型——*societas* と *civitas*——においてとらえ、人的な関係に基礎をおく *societas* は、氏族ならには胞族 (*phratry*)、部族、部族連合体をその組織の単位とし、地域と財産に基礎をおく *civitas* は市区をその組織の単位とするとし、それぞれにもとづく社会体制を氏族社会、政治社会と呼んで、氏族組織については、「それは野蛮状態に発生し、未開状態の三小期を通じて継続し、政治的社会が樹立されるまで存続した」とし、「政治的社会は文明時代が開始するまでは発生しなかった」としたのである。⁽⁸⁾ つまりモーガンは、H・J・S・メインの提唱した血縁的社会から地縁的社会への歴史的発展の二段階説を継承して、政治的社会の成立を地縁的社会の成立にみたのである。こうして、モーガンは、野蛮、未開、文明という進化的な社会発展

の三段階論とならんで、*societas* (社会的段階) → 氏族社会 → *civitas* (政治的段階) → 国家という、政治的發展の二段階説を提唱したのである。そしてエンゲルスは、この發展段階論を基本的に受けついたのであった。

モーガンのこの段階区分は、モーガンの理論的視座に立つてみたばあいでも、あきらかに不整合である。なぜなら、未開と文明とのあいだの質的差異は明確であるが、野蛮と未開とのあいだのそれは不明確であり、氏族社会は未開と対応しないからである。これは要するに、社会の發展段階を画するのに、社会構成体の構造的性質をもって主要な基準とする、という視点が確立されていなかったからにはかならない。むしろ、道具や技術も、社会の文化的發展段階をとらえる客観的な指標であることには間違いないが、それはやはり多面的な社会活動の一産物にとどまるのであって、それをもって総合的な社会發展の主要基準とすることはできない。そうであれば、モーガンの三段階論は、*Societas* と *civitas* の二段階把握の下に整序されなすなければならなかったのである。このばあい重要なのは、原始社会史の發展を、一つの社会構成体の發展としてとらえるという視点であって、そのかぎりでは、原始社会史もまた例外ではないのである。

この点に関連して注目されるのは、ソ連の人類学界の動向である。すなわちそこでは、モーガンの時代区分が、原始共同体制度の繁栄期を、その生成期ならびに崩壊期から区別する境界を明確にしていないうとして、原始社会史の三段階説が提唱され、さらにその後、この三段階説が獲得經濟から生産經濟への段階的推移をふまえていかなかったことが反省され、今日では、それをふまえた四段階説が提唱されるにいたっている。この段階区分の内容を要約すると、およそつぎのとおりである。

三段階説

提起者

トルストフ

コスヴェン

ペルシツ

原始社会史の段階区分と前国家段階（徳本）

第一段階	原始群	原始群	原始群
第二段階	原始共同体	氏族制度	原始氏族共同体
第三段階	軍事民主制	軍事民主制	原始近隣共同体
四段階説A			
提起者	ゼルノウ	ブチノフ	
第一段階	原始社会前期	原始群	
第二段階	原始社会中期（獲得経済）	血縁共同体（獲得経済）	
第三段階	原始社会後期	氏族共同体	
第四段階	原始社会崩壊期（生産経済）	混成共同体（生産経済）	
四段階説B			
提起者	セミョーノフ	ペルシツ	
第一段階	原始人群	原始群	
第二段階	氏族的原始共產社会	原始氏族共同体	
第一期	原始氏族的共同体主義（獲得経済）	前期氏族共同体（農耕・採集民）	
第二期	家族・クラン集団主義（生産経済）	後期氏族共同体（農耕・牧畜民）	
第三段階	氏族社会の階級社会への転化	原始近隣共同体 ⁹⁾	

一見してわかるように、四段階説Aは典型的な四段階論であるのにたいし、四段階説Bは、三段階説を継承しつつその第二段階をさらに二つの段階に区分するものである。両者は、獲得経済社会と生産経済社会との質的差異の位置づけをめぐってわかれており、また個々の提起者相互の間では、所有形態、剰余生産の存否、共同体の類型などをめ

ぐる基準の設定ならびに名称の採用をめぐって見解が相違しているのが、全体としては、原始社会の発展段階を、生成期、繁栄期、崩壊期においてとらえようとする問題意識があることを見逃してはならない。それは、事物の運動を、その生成、発展、消滅の過程においてとらえるという弁証法的認識方法の、原始社会史への適用という意図のうえに立つものだということができよう。これをモーガンの時期区分に関連させていえば、生成期は野蛮の低段階から中段階にかけてに相当し、崩壊期は未開の中段階にはじまり高段階において進展するということになるのである。社会構成体の把握という観点に立ったこのような発展段階論は、モーガンのそれに比して、あきらかにより総合的ないしはより包括的なものであるということができる。

しかしながら、かかる段階区分もまた筆者のとるところではない。その最大の理由は、原始社会史の段階区分を行なうばあいには、それぞれの段階の質的レベルを、全人類史の発展段階の位置づけとの関連のなかで、とらえかえさなければならぬと考えるからである。そのときには、三段階にせよ四段階にせよ、それぞれの段階を並列的に位置づけることは出来なくなるはずである。すなわち、全人類史との関連というならば、第一段階なるものは人類社会そのものの生成期であって、巨視的にいえば、人類の自然史的過程から社会史的過程にいたる、特殊な移行期にほかならない。数十万年から百万年にもわたるこの時代は、人類の社会的諸関係がきわめて未発達である反面、すでに幾多の考古学的資料がしめしているように、人類の生物学的進化がつづいていた時代である。その意味では、ここにいる第二段階以降の全人類社会史の段階とは決定的に区別されなければならず、したがってまたそこにおける段階区分の基準もおのずと違ったものとならざるをえないのである。社会構成体が未成立な時代について、社会構成体の特質をもって区分するなどということが出来ない相談であることはいうまでもないであろう。だからこそこの時代については、生物学的進化をとらえる原人類、旧人類、新人類の段階区分や、生活様式をとらえる前期旧石器時代、中期旧石

器時代、後期旧石器時代といった考古学的区分によるほかはないのである。

これにたいして、第二段階ないしは第二、第三段階とされている原始共同体社会の時代は、のちの階級・国家社会の全時代とならぶべき位置にある。なぜなら、社会構成体の構造的性質という点からいうならば、原始共産的経済構造とそれに対応する共同体的秩序の性格は、階級関係を基礎とする国家権力による統一秩序の構造と、質的に對比されるべきだからである。獲得経済と生産経済との段階区分を、この対比と同一レベルに設定することは適切ではない。もとより、生産経済への転化は、生産組織とそれをつうじての社会的組織の変化をもたらす。だが、そのことがただちに、共産的な原始共同体社会の質的転換をもたらすわけではないのである。この区分は、各階級社会の区分と並ぶべき位置にあるというべきであろう。

最後に、第三段階ないしは第四段階とされている原始共同体社会の崩壊期は、これまた他のどの段階とも並列的に位置づけられるべきではない。この時期は、崩壊期であるとともに、新しい階級・国家社会の生成期でもあるのである。右にのべた人類社会史におけるもっとも大きな二つの段階のあいだの、特殊な過渡期に相当するのである。このような過渡期は、階級・国家社会から高度共産社会への移行の過渡期にたいしてのみ、同一レベルで位置づけられるものというべきであろう。したがって、この段階を原始共同体社会の範疇内にとらえて、その第何段階とするやり方は適切ではないといわなければならない。それは、社会主義段階を階級・国家社会の第何段階と呼ぶないのと同様である。では、原始共同体社会の崩壊期であり、同時に階級・国家の形成期でもあるこの段階をどう呼ぶべきであろうか。その最終的な確定は今後にまたなければならないが、当面、筆者は政治学的見地から、この過渡期を前国家段階とするのである。

以上のことをふまえたうえで、個々の四段階説についていうならば、ゼルノウの区分では人類社会の生成期という

把握がみられず、ブチノフのばあいは原始共同体社会を一つの社会構成体としてとらえる視点がなく、しかも両者ともに、生産経済の段階を崩壊期と同一視する冒険をおかしている。これだと原始共同体社会は獲得経済の社会だといふことになるが、農牧生活の歴史は、少なくとも紀元前九〇〇〇年から六〇〇〇年にまでさかのぼって認められているのである。¹⁰そこへいくとセミョーノフとペルシツは、三段階区分を基礎とし、獲得経済と生産経済との区分を第二段階においてみているのであるが、セミョーノフにおいては概念が不明確であり、ペルシツの方が共同体概念で一貫していることもあって、よりすっきりしているといふことができよう。だがそのペルシツのばあいでさえ、政治的發展段階をとらえるという視角が欠落していることに注意しなくてはならない。

社会の発展段階というばあいに、それを全体的に代表するものは、それぞれの社会構成体の基本構造であるが、それは、その社会を物質的にささえる生産活動の様式と、その生産関係を基礎にした全社会活動を維持する秩序の体系からなりたっている。いわゆる土台、上部構造の関係を、ただ土台の規定性においてのみとらえ、土台における変化がすべてを決定すると考えるならば、それは安易な経済決定論へ流れるおそれなしとしない。事実、獲得経済と生産経済との二段階論の重視にはその気配がみられる。このばあい、あわせてとらえられるべきは、それぞれの社会における全体的秩序の組織体系でなくてはならない。そしてまさにこの秩序の体系的質的転化として、政治現象の発生があり国家の成立があるのである。モーガン、エンゲルス学説における、*societas* と *civitas* との段階区分や軍事民主制の追究は、このかぎりにおいて積極性をもつものであった。トルストフやコスヴェンはそれをそのままひきうつしたが、軍事民主制が一部世界にしか妥当しないものであることは、今日ではもはやあきらかである。問題は、モーガン、エンゲルスの方法のもつ積極性をどう生かすかであろう。筆者が前国家段階を提起するのはかかる意味においてである。

ところで、政治的發展段階をめぐって、モーガン、エンゲルス説と対照的な位置にあるのは、欧米における、経験科学としての政治学ないしは政治人類学である。そのなかには、M・デュベルジェなどのように、「政治は人間の現われる以前に、地上に出現している」⁽¹¹⁾として、動物社会の政治を論じている者もいれば、E・マイヤーやW・コッパーズなどのように、国家原始存在説をとる者もいるが⁽¹²⁾、その大半は、政治現象を人類社会に普遍の現象とみたらうえで、国家をその第二次的形成とみている。モーガン、エンゲルス説と欧米政治学の通説とを対比してみたばあい、両者はともに二段階論という点では類似しているようにみえるが、前者が政治社会の成立を国家の成立にみているのたいし、後者が政治原始存在説に立っているという点で、両者は対照的なのである。この政治原始存在説の根底には、人間を本質的に政治的存在としてとらえる思考があり、政治なしには社会生活はありえないとする発想が前提となっている。むしろここにはそれだけでなく、かつての国家学に代表された、政治を国家特有の現象だとする觀念にたいする批判として登場した、今世紀初頭以来の多元的国家論や社会学的国家論の系譜があり、それだけに、政治をその機能においてとらえるという点が特徴的である。だが、社会集団の機能に政治をみることを重視していけば、それは不可避免的に政治の領域の無原則的な拡大をまねかずにはおかない。生物の存続に生理機能が不可欠であるように、社会生活の維持には政治機能がなくてはならないというとき、そこでは、政治は社会集団の秩序とほとんど同義語と化しているのである。社会的秩序と政治的秩序との同一視は、*societas* と *civitas* との同一視につうずる。政治的なるものを他の社会現象と区別し、政治をその本質と特殊性において把握するという視点がなくては、政治の成立やその發展段階をあきらかにすることはできないというべきであらう。

この点に関するR・M・マッキーバーの自己撞着は教訓的である。『政府論』をみてみよう。かれもいう。「地球上、人間が生活するところではどこでも、どのような生存水準であろうと、そこには社会秩序があり、常にある種の政府を充満させている。政府は社会の側面である⁽¹³⁾」と。かれによれば、この政府のもっともふるい原型は家族のなかにあるのであり、それがやがて、人間集団の発展とともに共同社会にその存在場所を見出していくのである。だがかれは、人類学的諸研究が、もっとも単純な社会では政府装置が欠如していることをあきらかにしていることを知っている⁽¹⁴⁾。だから、単純な共同社会では国家形態なしに社会的規制が遂行されうるが、複雑な社会では、政府の行為は十分に成長した国家の存在を必要とする、⁽¹⁵⁾というのである。前の方でかれが政府というときには、あきらかに秩序維持機能という点でとらえているの⁽¹⁵⁾にたいし、後の方では統治の組織でとらえている。しかもそういいながら同時にマッキーバーは、「本書をつうじて、限定する形容詞なしに政府というときには、われわれは政治的政府、つまり大小の共同体社会を越えて一つの秩序体系を維持するところの、中央集権的組織を意味する」といい、「政治的政府は、社会的規制が中央社会機関によって受けつがれるとき、または統轄されはじめるときに現われる⁽¹⁶⁾」としているのである。むろん、政府に非政治的政府があろうはずがない。ではなぜかれはことさら「政治的政府」といわねばならなかったのであろうか。かれはこのことをほとんど説明していない。あきらかにそこには、秩序維持機能と政府、非政治と政治との概念の混乱がみられるのである。

これがD・イーストンになると、もう少し格好だけはついてくる。政治体系論がうち出されるからである。かれは、政治体系には三つの領域が存在するとする。政治的共同体 (political community)、制度 (regime)、政府 (government) ⁽¹⁷⁾ がそれである。だが、その政治体系は、かれにおいては行動の体系にはかならず、したがって過程分析が主要な対象とされる⁽¹⁸⁾。イーストンによれば、政治的配置はあらゆる種類の社会組織、家族、血縁集団、会社企

業、労働組合、政党、教会などにまたがっているものであり、「それらの社会的下部組織の各々が、われわれが政治体系としてあげうるような一連の活動をふくんでいる」⁽¹⁹⁾のである。人間行動の政治的機能、これが政治分析の対象であり、したがってまたその範囲は全社会集団に拡大されるわけである。しかしながら、かれは、同時に政治と社会との区別を忘れない。ではかれはそれをどう区別するのか。この点については、政治体系と社会体系を区別するものとして四つの点をあげている。すなわち、①政治的役割 (Political roles) や活動をその他の活動から識別しうる程度 (extent)、逆にいえばそれらが家族もしくは血縁集団のような限定された構造に埋没されている程度、②政治的役割のない手たちが社会のなかで独自のグループを組織し、内的団結や結合の意識を保有している程度、③政治的役割が富や名声その他の非政治的基準に基盤をおいたヒエラルキーから区別されうるようなヒエラルキーを形成している程度、④政治のいない手たちにとって補充過程や選択基準が他の役割と対照的に相違している程度、がそれである。⁽²⁰⁾そして、「もしわれわれがかかる指針を使うことができるならば、定義の厳密性と体系間の境界についての経験的記述に不断に意をはらいつつ、いろいろな社会を段階づけることが可能になるだろう」⁽²¹⁾というのである。むしろこれも、この境界に物理的な区分線がないことは認めている。だが、「経験が政治的体系と他のそれとの境界の存在に実在性をあたえる」⁽²²⁾というわけである。経験科学的な過程分析にたった政治範囲の設定、これがイーストンの特色だといえよう。ここでは、どこまでも程度もしくは広がり (extent) が問題なのであって、政治的なるものの質や、それを生み出す社会の構造的 성격が問われているのではない。それは政治的機能の経験的把握という流れのなかで、そこに一定の対象範囲をもうけようとするものなのである。しかしその限りにおいてはあれ、政治の範囲を設定し、その範囲の大小を経験的事実として認知していくことをとおして、社会の段階区分が可能となるとしている点は注目されなければならない。それはたとえば G・バランディエなどが、「人間社会はいずれも政治的なものを産出する」⁽²³⁾

とし、政治的なるものを限定的な範疇としてではなく、あらゆる社会的組織体の属性として考察することを主張しているの⁽²⁴⁾に比べれば、あきらかに一步前進だからである。

では政治人類学の領域では、政治的發展段階の問題はどのようにとらえられているのであろうか。M・J・シュワルツ、V・W・ターナー、A・テューデンらによる、最近の大著『政治人類学』をみてみよう。そこでは、かれらは「政治」を定義することの困難さを指摘したうえで⁽²⁵⁾、「政治的」という形容には、公的目標、目的意識性、特定のパワーという三つの性格がふくまれているとし、「したがって政治の研究は、公的目標を定め、遂行し、達成し、そういう諸目的に関係する集団の構成員によってパワーの行使がなされる、そういう諸過程の研究である⁽²⁶⁾」としている。これは方法論的には、イーストンと同質のものといつてよいであろう。ただかれらは、さきあげたイーストンの三つの領域規定にたいしては異議をとない、political community のかわりに political field という領域概念をもちだしており、政府についてもその存在しない社会を強調するなど、政治の範囲はイーストンのばあいよりもさらに広く考えられている⁽²⁷⁾。それは、公共的秩序をめぐる諸関係を、すべて「政治」の名の下にとらえようとするからにはかならない。人間社会はすべて本質的に政治社会なのであり、そこにおける秩序維持機能の進展とそれを可能ならしめる諸関係、諸組織の発展が、その政治社会の発展をもたらすのだというのがここでの基本的認識である。したがって、政治的發展段階の問題は、基本的に同質社会における量的発展としてとらえられ、その延長上に政府や国家の成立が位置づけられるのである。このとらえ方は、E・E・エヴァンス・プリチャードとM・フォーテスの『アフリカの政治体系』（一九四〇年）から、L・クレイダーの『国家の形成』（一九六八年）にいたるまで、そうじて政治人類学に共通する考え方だといふことができる⁽²⁸⁾。

こうしたなかにおいて、最近、筆者は一つの注目すべき見解に接した。W・T・サンダーズ、J・J・マリーノの

『新世界の先史時代』の「序論」がそれである。かれらもまた政治原始存在説に立っていることにはかわりはないが、注意をひくのは、かれらが原始社会の政治的發展段階について、具体的な段階設定をおこなっていることである。すなわちかれらは、E・R・サーヴィスの問題提起にのっとり、原始社会の段階区分を、社会組織または社会構造にもとづいて、バンド、部族、首長国、古代国家の四つに分類している。⁽²⁸⁾かれらの規定によれば、バンド (band) は通常百人以下の小社会で、共通の領域を有し、地域外婚を行なう採集狩猟民の社会であって、血縁による義務と紐帯によって統合された、政治的リーダーや政治的格差をもたない社会である。つぎに部族 (tribe) は、バンドよりも大きな複数共同体の社会であって、共同体の統合原理は一様ではないが、部族社会での役職には権力の効果的執行に必要な経済的基盤が欠けており、また共同体の内部でも共同体の相互の間でも格差がみられない、そういう社会である。つぎに首長国 (chiefdom) は、複数共同体を統合する新しい構造原理をもった社会で、格差が存在し、リネジは段階化され、威信がそれに対応しているが、その格づけは依然として血縁関係に基礎をおいており、首長の人格は不可侵であり、その権力の経済的基盤は物資の再配分者としての役割にある。外見的には、首長国はまた、部族とちがって中心地あるいは首府というべき新しい集落が存在していることが特徴的である。最後に古代国家 (ancient state) は、首長国と共通する原理のほかに、高度の中央集権化と権力の集中がみられ、支配者 (王) は、法を制定し、軍隊、警察、裁判所によってその法を強制する権威を有している。なお、古代国家には非都市的国家と都市的国家の二つのタイプがあり、都市的国家においては経済的、社会的分化がよりすすんでいるが、いずれもその規模は首長国をはるかにうまわるものである。

これらの段階区分は、むろん、人類学的立場からする区分にほかならないが、そのばあいには、区分の基準を道具や技術などに求めるのではなく、社会の全体構造、それもとくに上部構造の性格においている点が注目されるし、さらに

従来の原始政治社会→国家の二段階論を、四段階把握というかたちで発展させていることが注意をひくのである。そこでこの四段階区分についてであるが、ここでいわれているバンドと部族とのあいだの差異は、部族によって多少のちがいはあるものの、基本的には共同体の規模の差異であり、社会的組織原理としては、質的差異というよりはむしろ量的差異にちがいが、部族と首長国ならびに古代国家とのあいだには、はっきりとした社会内の格差の存在つまり特殊利害の対立があり、したがってまたそれを統合する新しい組織原理の出現があるのである。この点については、実際の人類学的調査においても、共同体の階層分化がはっきりととらえられるといわれており、その意味でも、前の二段階と後の二段階とのあいだの区別は明確である。この両者の発展段階の相違は、さきに筆者が指摘した、特殊利害の発生にともなう公権力の成立に対応するものといつてよいであろう。こういうわけで、公権力の成立段階を画することの妥当性は、欧米の人類学的研究のなかからも裏づけられはじめていたのである。

三

さて、ここにバンドと部族の段階といわれているものは、原始共同体社会の「繁栄期」に相当する段階であり、社会構成体としての原始社会の典型である。この段階をどう呼ぶかは、原始社会の構造的基本単位をどう認識するかというにかかわる。この点については、ソ連においても、とくに経済単位の把握をめぐる氏族論と共同体論との二方向があり、そのいずれとも結着がつかないということであるが、ブロムレイやペルッツがいうように、G・マードックの研究以来、今日では、氏族関係と生産関係が完全に一致するとはいえないが、発達した原始社会においても、社会構成員の約四分の三が同族者であり、残りの約四分の一が婚姻を介して入ってきた異族員であることはあきらかであり、そのかぎりにおいて氏族と共同体とはほぼ一致していたとみるべきであろう。⁽³⁰⁾ 氏族的所有の形態はそ

の反映にほかならなかった。このことの確認のうえに、社会的秩序の組織体系が氏族制度を軸にしており、氏族が社会的基本単位であったことを把握するなら、この社会構成体は、氏族共同体社会として位置づけることがもつとも適切であろう。

この氏族共同体は、エンゲルスの表現をかりれば、野蛮の中段階で発生し、その高段階でさらに発展し、未開の低段階において全盛期にたつする。そこでは単純分業や協同労働もみられるし、原始宗教にもとづく社会的規範の維持形式の変化もある。だがそれでもこの社会は、文字どおり原始共産的な社会であって、そこにおける統一秩序は、どこまでも共同の利害をめぐっての自治的性格のものであることを忘れてはならない。そこには他人の労働や人格にたいする支配とそれへの隷属という支配・被支配関係を入れる余地はなかったのである。なるほどそこでも紛争はありうるであろうし、規範の順守は要求されよう。だがその実現は、このような条件に立っているかぎりにおいて、権力的強制を必要とはしないのである。これはなにもモーガンの研究だけから実証されているのではなく、たとえばA・L・クローバーやR・H・ローウィが、カリフォルニアのユーローク族について、そこには固有のいかなる種類の権利も権力もなく、公的性質の刑罰も存在しないことをあきらかにしたことや、今世紀に入ってからの、数多いバンドの研究などによっても裏づけられている。この段階においては、戦争においてさえ、それは「部族の絶滅に終わることとはあつても、その抑圧に終わることはけつしてありえない」³¹のである。支配を知らない社会、まさにそれは政治なき社会であつたというべきであろう。政治とは秩序一般でもなければ秩序維持機能そのものでもない。政治とは、社会共同体の内外における特殊利害の発生にともなう、当該社会共同体にたいする公権力による統一と支配と対立、ならびにそれをめぐる運動をいうのである。では公権力とはなにか、それはたんなる公法概念上のそれではなく、社会構成員の統一秩序への共通の意志にはじまり、特殊利害の発生につれて、それが対象化されて幻想上の共同利害に

転化していくもとの、物理的強制力を背景とするところの、社会構成員の行動様式にたいする統制力をいうのである。

ところで、この氏族共同体のもとで、獲得経済から生産経済への移行がすすむことは、さきにも述べたとおりである。

エンゲルスは、モーガンの時代区分を総括して、「野蛮——既成の天産物の取得を主とする時代」、「未開——牧畜と農耕の知識を獲得し、人間の活動によって天産物の生産をたかめる方法を習得する時代」⁽³²⁾としたが、この区分が、氏族共同体の段階を前後にわかつものであることは疑いを入れない。なぜなら、生活資料の獲得、生産活動のあり方の相違は、共同体構成員の生活形態の変化を意味するし、生産経済への移行はまた恒常的な剰余生産物を生みだす経済的前提の成立を意味したからである。そこに生まれた生産諸形態が、社会的諸関係の一定の変化と、それに対応する社会的規範や秩序維持組織の変化をもたらしたであろうことも想像に難くない。しかしながら、ブチノフなどのように、獲得経済から生産経済への移行が、氏族共同体の組織原理をかえたというふうに解するならば、それはゆきすぎである。モーガンの表現をかりれば、氏族、胞族、部族のすべてにわたって、氏族制度が社会の基本的な組織原理であることには、かわりはなかったからである。この点に関連して、サンダーズとマリノーが、バンドと部族との段階区分をこの二段階に相応してとらえているのも正しくあるまい。バンドが獲得経済のうえになりたっていたことはたしかだが、部族がつねに農耕民のあいだの組織であったとはいえないからである。

さらにまた、この二段階のあいだに厳密な境界をひくことも適切ではない。この移行は、自然的条件に左右された、きわめて長期にわたる過程であったし、したがってまた、そこにあらわれる変化も、ゆるやかなテンポのものであったからである。この意味において、「たとえば前期新石器時代の農耕社会と狩猟社会とを、根底から違う、くらべものにならない二社会として、両者のあいだの境界を絶対視すべきではない」⁽³³⁾のである。このことをふまえたうえ

で、氏族共同体段階を、獲得経済段階と生産経済段階との前期と後期とにわかつことが必要なのだというべきであろう。なお、ベ・ヴェ・アンドリアノフの要約によれば、この移行の出発点は、前方アジアおよび地中海東部（前八〇〇〇—前六〇〇〇年紀）、インドシナ（前七〇〇〇—前六〇〇〇年紀）、イラン・中央アジア（前六〇〇〇—前五〇〇〇年紀）、ナイル流域（前五〇〇〇—前四〇〇〇年紀）、インド（前四〇〇〇—前二〇〇〇年紀）、インドネシア、中国、メソアメリカ、ペルー（前三〇〇〇—前一〇〇〇年紀）とされ、考古学的区分でいえば、中石器時代と新石器時代との変り目とされている。³⁴ この時期が、氏族共同体の崩壊期にかなり先立つものであることは、改めて説明するまでもないであろう。

では、氏族共同体の崩壊期は、どのようにとらえるべきであろうか。この点については、最初にあげた拙稿において私見を展開しているので、できればそれを参照していただきたい。³⁵ ここでは必要最小限度の指摘をしておくにとどめる。まず、氏族共同体の崩壊に関しては、つぎのようなK・マルクスの指摘が参考となろう。すなわちマルクスは、生産経済の発展のうえに成立する、原始的共同社会の継起的発展段階を農耕共同体とよび、それをより原始的な段階から区別する特質として、共同体の血縁的束縛からの離脱、家屋や屋敷地の私的所有、耕地の分割と生産物の個別的領有、の三点をあげている。マルクス自身の言葉をひこう。「自然的な血縁関係という強靱ではあるが狭隘な紐帯から解放された、土地の共同所有とそれから生じる社会諸関係とが、農耕共同体に強固な基盤を保障し、それと同時に、個別的家族の排他的領域たる∧私的な∨家屋と屋敷地、分割耕作、およびその果実の私的領有が、より原始的な共同社会の構造とは両立しない個人性の飛躍をもたらすのである」。³⁶

この変化は、いうまでもなく、原始共産的な経済構造の崩壊過程をしめすものにはかならない。この崩壊過程の端緒は、恒常的な剰余生産物の成立であるが、内容的には、未開の中期における社会的分業や交換経済の進展にならん

であらわれてくる、私有財産の発生と奴隷制度の出現をもってはじまる。当初のあいだ、私有財産は家畜ならびに家財の私有であり、奴隷制は、労働力獲得への要求にもなる戦争捕虜の奴隷化としてあらわれるのであるが、それがやがて、家屋ならびに周辺の屋敷地の占有につづく私有、主人と奴隷への分裂につづく社会的分化の進展へとすすんでいくのである。一方における生産手段の共同体的所有と、他方における私的所有ならびに社会的分化の進展という、この二重性こそ、この段階の過渡的性格をしめすものにほかならない。だからこそマルクスも規定したのである。「社会の原古的あるいは原始的構成の最近の、そして最後の層としての農耕共同体は、同時に、原始的構成から第二次構成への過渡段階であり、したがって、共同所有にもとづく社会から私的所有にもとづく社会への過渡段階でもある。この第二次構成は、もちろん、奴隷制と農奴制とに基礎をおく諸社会の一系列をふくんでいる」と。⁽³⁷⁾

このような、共同体の土台における構造的変化は、当然のことながら、上部構造の領域における構造的変化と照応する。このばあい外見的には、共同体の変化は、人口規模の増大と地縁的紐帯の成長にうながされて、氏族間の結合や部族組織の強化、さらには部族連合体の出現へと近隣共同体の広域化というかたちですすんでいくが、構造的には、共同体の内外における特殊利害の発生と発展にもなう、社会的秩序維持の組織体系の質的变化という内容をもってすすむのである。この端緒をなしたものは、武力組織による捕虜の奴隷化である。なぜなら、捕虜の奴隷化とは、人間の人間にたいする権力的強制を意味したからである。それは、かつて人類が知らなかった現象、すなわち、他人の労働を権力的に支配するという政治権力現象の発生にほかならなかった。

ところで、奴隷の発生は、いうまでもなく階級形成の第一歩であった。奴隷制はいったん生まれると、やがて対内的にも制度化され、しだいに世襲化されていく。そしてそれとともに社会内の階層分化は進展し、世襲的貴族と共同体構成員との格差は深まり、階級形成への道が進展していくのである。もっともこの道には、エンゲルスもいうよう

に大きく二つの道があり⁽³⁸⁾、一般にアジア的世界においては、社会的管理機能になう部分が支配階級へと転化していき、共同体の内部構造はほとんど崩壊しなまま残るのであるが、それでも従来の自治的管理組織が、特殊利害の発生と共同体の規模の拡大にうながされてひきおこされる、新しい統一秩序への要請にたいして、質的転化を余儀なくされていくことには変りはない。新しい体系的規範の順守を保障する権力的強制と、それを実行していくにたるより整備された秩序維持機関の創出がそれである。そこに、それまでの社会にはみられなかったところの、一定の地域性と結びついた社会共同体を公的領域とし、支配と隷属の関係を部分的にそのなかにふくみつつ、秩序の体系としての法と、その法の順守を強制する、物理的強制力装置と、司法機関や行政機関をともなった公的権力が対内的にも生みだされ、そのことによって、公的権力による統一と支配というかたちで政治社会が成立するにいたるのである。

ア・エム・ハザノフは、この段階について、広義の階級形成期は原始共同体制度解体の全段階を包摂するが、狭義の階級形成期は原始社会解体の最終段階と解すべきだとしているが⁽³⁹⁾、そこではあきらかにエンゲルスやマルクスがモーガンにならって未開の中位段階と高位段階を区別したことが念頭におかれている。しかし、このばあいの広義と狭義の使いわけは、段階設定にさいしては、かえって混乱をもたらすといべきであろう。未開の中位と高位をわかつ基準が、階級形成の基準ではなかったことを考えればなおさらである。しかし、「ソ連の研究者の大部分は、原始社会史の時代区分において、階級ならびに国家の出現に直接に先行する、この時代区分の最後の段階を特別な期もしくは亜期として分立すべきであるという点においては同意見である⁽⁴⁰⁾」と述べているのは、筆者の観点と基本的に一致する。ただソ連の論者と相違するのは、ソ連の論者においては、政治的發展段階とりわけ公権力の成立段階というところえ方がないことである。これはおそらく、モーガン、エンゲルス以来の、政治と国家の事実上の同一視という傾向が尾をひいているからであろう。したがって、「氏族共同体から階級社会の近隣共同体へ移る際の間形態は大家族で

はなくて、原始的近隣（混成、近隣₄₁氏族）共同体なのである」としているのも、内容は理解できるけれど、それをもつてこの過渡的段階をしめす概念とするとなると賛成しがたいのである。階級社会を近隣共同体と段階規定するのが不適当なように、この段階についても、政治的發展段階をそのうちにとらえているような段階規定が必要であるといふべきであろう。その意味では、さきあげたトルストフとコスヴェンが軍事民主制という規定をしているのであるが、これはモーガン、エンゲルス説のひきうつしであり、軍事民主制が一般的性格をもつものでないことは、アジア的世界における寡頭制の形成をみれば明瞭である。また筆者の立場でいえば、公権力の成立段階ないしは政治社会の成立段階という規定が考えられるが、それはあとの階級・国家社会にも妥当するものであつて適切ではあるまい。以上のようなことから、この過渡的段階を前国家段階と呼ぶのである。

この前国家段階への移行は、歴史の進行のなかでは、むしろその非斉一性と非同時性のもとでとらえられなければならないが、人類学者や歴史学者たちがいうところの、首長国から原初的国家（pristine state）ないしは「小国家」から「地方国家」にいたる過程が、ここにいうところの公権力の成立過程に相当する。われわれは、その具体的な移行段階を、もっともふるくは上・下エジプト王国の形成過程（前四〇〇〇年代）に、ギリシアではテセウスに代表されるいわゆる英雄時代（前一五〇〇—前一二〇〇年）に、ちかくは中南米の古典期（三〇〇—九〇〇年）における、マヤやティアワナコなどでの統治組織の發展過程に、さらに最近では、アフリカのシルックやクペールの統治組織などにみいだすことができる。わが国では『魏志倭人伝』にみられる三十国、牧健二氏のいう小部族国家の段階（前一〇〇年—後一〇〇年）がそれにあたるものと考えられる。もとより国家の成立はこれよりかなりあとになるのであるが、両者を混同してはならない。公権力の成立から階級的國家権力の成立への過程は、決して単線的な過程ではなかつたし、また短時日にすすんだのでもなかつた。それはゆうに一時代を画するにたるほどの、歴史的な過渡期だつた

のである。この問題については、また稿をあらためて論ずるであろう。

おわりに

以上のことから、最後に筆者の段階区分を要約してしめしておこう。位置づけかたとしては、まず各段階のレベルの設定からはじめなければならぬ。それを図式化すると、ほぼつぎのようになる。

一、人類発展段階

動物的段階（類人猿段階）→人間形成段階（過渡期）→社会発展段階

二、社会発展段階

原始共産的段階（第一段階）→前国家段階（過渡期）→階級・国家段階（第二段階）→社会主義段階（過渡期）→共産主義段階（第三段階）

三、原始社会発展段階

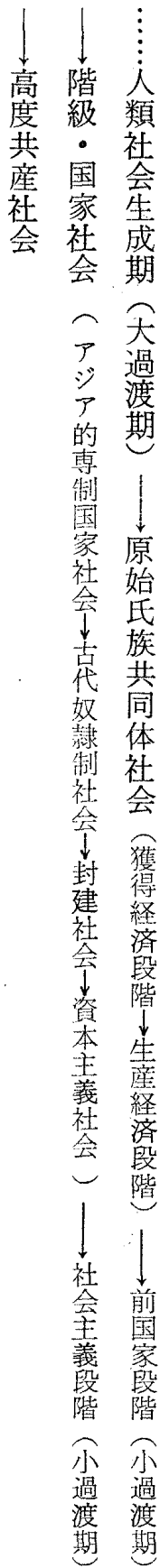
生成期（人間形成段階）→繁栄期（原始氏族共同体）→後期氏族共同体（生産経済段階）→崩壊期（前国家段階）

四、階級・国家社会発展段階

生成期（前国家段階）→繁栄期（階級・国家社会）→アジヤ的段階（アジヤ的専制国家）→古典古代的段階（奴隸制国家）→封建段階（封建国家）→近代資本制段階（資本主義国家）→崩壊期（社会主義段階）

このような区分については、わが国でも多くの論者が言及しているが、それらとの対比という意味もふくめて、その代表的な論者の一人である林直道氏の見解との相違について簡単にふれておこう。林氏は、芝原拓自氏が人類史を

資本制生産様式と前資本制生産様式とに大区分している点を批判されて、「人類史における『大区分』の問題」は、まず原始共同体と階級社会とに「大区分」されなければならず、人類史のあゆみ全体は、原始共同体——階級社会——社会主義・共産主義という三つの大段階で把握しなければならぬとしておられる。⁽⁴³⁾この林氏の芝原氏批判はたしかにあたっているといっている。だがそれにもかかわらず、林氏のとらえ方では、「人類史」といいたが筆者のいう人類発展段階の把握がないし、社会主義が共産主義と一緒にされていることからわかるように、過渡期を特殊な段階としてとらえる視点もないのである。またアジア的段階については、「東洋的専制主義は、古代奴隸制、封建農奴制とともに、前資本主義的支配・隷属体制の基本形態の一つである」とされ、それが、人類最古の支配・隷属の体制であることを指摘されながら、それを「古代奴隸制と並ぶ、その東洋的特殊形態」と位置づけておられる。⁽⁴⁴⁾本稿ではこの点についてふれる余裕がなかったが、筆者は「東洋的専制主義」なるものは、実は一部のヨーロッパ世界をのぞく、ほとんど全世界の古代国家の形態であり、「アジア的専制国家」として、一つの社会的発展段階を画するものと考えている。なお原始共同体からの移行については、林氏も農奴隷への移行を認めておられるが、筆者は、もともと小区分のレベルでは、すべての社会構成体がおなじ歴史的発展段階を一樣に経過するとは考えていない。このことをつけくわえたいので、右の図式化のうえにたって、人類社会史の発展段階を総括しておく、ほぼつぎのようになる。



政治学の基本的課題である統一と支配の原理の究明は、現代国家の解剖とならんで、ここにいう前国家段階の解明

にかかわるところが大きい。政治発生論や国家起源論の問題もまたここに帰着する。本稿では、それへむけての、素描的な全体的位置づけを試みてみたのである。

- (1) 拙稿「政治及び国家の成立と人類学——モーガン、エンゲルス説の批判的継承のために——」『国家論研究』第五号、一九七四年 論創社、九四—一一八頁、ならびに、拙稿「『国家の起源』についての政治学的考察」R・H・ローウィ、青山道夫訳『国家の起源』一九七四年 社会思想社、一一五—一六三頁 参照。
- (2) F・エンゲルス「家族、私有財産および国家の起源」『マルクス・エンゲルス全集』第二一巻、一九七二年 大月書店、二九頁。
- (3) L・H・モーガン、青山道夫訳『古代社会』上巻、一九七二年 岩波書店、四三頁。
- (4) Emmanuel Terray, *Marxism and "Primitive Societies"*, N. Y. and London, 1972, pp. 15—23.
- (5) *Ibid.*, p. 90.
- (6) エンゲルス、前掲論文前掲書、二九頁。
- (7) モーガン、前掲書、三四—三五頁。
- (8) 同書、九七頁。
- (9) ユ・ヴェ・ブロムレイ、ア・イ・ペルシツ「エンゲルスと原始史の諸問題」ユ・ヴェ・ブロムレイ他編、中島寿雄訳『マルクス主義と人類社会の起源』、一九七四年 大月書店、三四—三五頁。
- (10) イ・エヌ・フロピン「牧畜の発生と原始社会における社会的分業」同書、一九二頁、ならびに吉田禎吾、寺田和夫『人類学入門』、一九七四年 東大出版会、七一—七九頁 参照。
- (11) M・デュベルジェ、横田地弘訳『政治学入門』、一九六八年 みすず書房、一二頁。
- (12) マイヤーは、あらゆる人間集団にはヒエラルキーの原則と組織原理が存在するとして、それを基礎に社会の意志統一をすすめるものとして国家が普遍的に存在すると考え、またコッパーズは、地域バンドにおける統治が領土を基盤とする国家の形成要素であるということから、国家の成立をきわめてふいふ段階に認めている。Eduard Meyer, *Geschichte des Altertum*, Berlin, 1884—1902. Wilhelm Koppers, *L'Origine de l'Etat*, Paris, 1963.

- (13) Robert M. MacIver, *The Web of Government*, N. Y. 1947, p. 21.
- (14) *Ibid.*, p. 37.
- (15) *Ibid.*, p. 33.
- (16) *Ibid.*, p. 22.
- (17) David Easton, *An Approach to the Analysis of Political Systems*, *World Politics*, 9. 1957. pp. 383—400. 京極純一訳「政治体制分析の一試論」『アメリカーナ』一九五七年一〇月号。
- (18) D. Easton, *A Framework for Political Analysis*, N. J. 1965. p. x.
- (19) *Ibid.*, p. 56.
- (20) *Ibid.*, p. 69.
- (21) *Ibid.*, p. 69.
- (22) *Ibid.*, p. 68.
- (23) G・バランディエ、中原喜一郎訳『政治人類学』、一九七一年 合同出版社、一〇頁。
- (24) 同書、四一七頁。
- (25) Marc J. Swartz, Victor W. Turner and Arthur Tuden ed., *Political Anthropology*, Chicago, 1966, p. 4.
- (26) *Ibid.*, p. 7.
- (27) *Ibid.*, pp. 11—12.
- (28) たとえばクレイダーはのべている。「国家の支配形態の下に組織されている社会生活の複雑さは、一つの単純な起源にまでさかのぼることができ、その起源における制度は、充分な国家形態に花ひらいていくような種子をもっている」と。
Lawrence Krader, *Formation of the State*, N. J. 1968, p. 11.
- (29) サーヴィスの著書は、Elman R. Service, *Primitive Social Organization*, N. Y. 1962. であるが、残念ながら筆者は未だ入手していない。サンダースとマリノの著書は、W. T. Sanders & J. J. Marino, *New World Prehistory: Archaeology of the American Indian*, N. J. 1970. 大貫良夫訳『新大陸の先史学』一九七二年 鹿島出版会、である。
- (30) ブロムレイ、ペルシツ、前掲論文前掲書、二〇一—二五頁 参照。

- (31) エンゲルス、前掲論文 前掲書、一五八頁。
- (32) 同書、三四頁。なおこの段階区分に関連して、エンゲルスは分業論の見地から、「游牧部族が残りの未開人の集団から分離した。これが最初の大きな社会的分業である」（同書、一五九頁）として、狩猟から牧畜への移行がその画期であると考えたが、牧畜が農耕に先んずるものではないことはもはや今日ではあきらかとなっており、狩猟→牧畜としてではなく、獲得経済（採集と狩猟）→生産経済（農耕と牧畜）として把握しなければならないのである。
- (33) ブロムレイ、ペルシツ、前掲論文 前掲書、三〇頁。
- (34) ベ・ヴェ・アンドリアノフ「歴史過程における農耕への移行の役割」ブロムレイ他編 前掲書、一二五頁。
- (35) 拙稿 前掲論文『国家論研究』第五号、一〇二—一〇九頁 参照。
- (36) K・マルクス「ヴェ・イ・ザスーリチの手紙への回答の下書き」前掲『全集』第一九卷、三九〇頁、四〇六—四〇七頁。
- (37) 同論文 同書、四〇七頁。
- (38) エンゲルス「反デューリング論」前掲『全集』第二〇卷、一八五—一八七頁 参照。
- (39) ア・エム・ハザノフ「エンゲルスと階級形成の若干の問題」ブロムレイ他編 前掲書、一四四—一四六頁。
- (40) 同論文 同書、一四五頁。
- (41) ブロムレイ、ペルシツ、前掲論文 同書、三三頁。
- (42) 牧健二『日本の原始国家』一九六八年 有斐閣、四九八—五一三頁 参照。
- (43) 林直道『史的唯物論と所有理論』一九七四年 大月書店、一六四—一六六頁。
- (44) 同書、四五—四七頁、一九八頁 参照。

（一九七五、八、三〇）